



UP選書

経済学五十年 上

大内兵衛

東京大学出版会

経済学五十年 上

大内兵衛

東京大学出版会

著者略歴

1888年 兵庫県に生る
1913年 東大法科大学経済学科卒業
日本学士院会員，東京大学名誉教授
経済学博士

主要著書

「アダム・スミス国富論」「ベッティー政治算術」
「財政学大綱」「経済学」「旧師旧友」「人物・風物・
書物」「我・人・本」「日本の曲り角」
「大内兵衛著作集」(岩波書店)

現住所

鎌倉市稲村ヶ崎 3-11-14



経済学五十年 上

UP 選書 55

1970年8月25日 初版
1978年6月25日 4刷



© 著者 おお大 うち内 ひよう兵衛 え

発行者 加藤 一郎

発行所 財団法人 東京大学出版会

113 東京都文京区本郷 東大構内 電話 (811) 8814 振替東京 6-59964

精興社印刷・新栄社製本

1333-05555-5149

はしがき

これは、昨年四月から、ことしの四月まで一年間、『エコノミスト』に連載した私の話をまとめたものである。それは、私が経済学というものをならいはじめてから今日まで五十年の思い出を、同じ学問をおよそ二十五年やっている鈴木鴻一郎・大島清・武田隆夫の三教授の質問に応じて語った、この学との学界についての漫談である。

矢内原忠雄君は、「自分について語ることは、いい趣味でない」といっている。同感であるが、つい、『エコノミスト』の企画と友人のいざないにのっかって、こういうことをやらかしてしまった。はじめは二、三回、ほんのちょっぴりと思っていたのであるが、いつの間にか長い物語となった。メモも何ももたないままでのおしゃべりで、筋が通らなかったり、いい足らなかったりであり、また余計な口もきいている。それよりも何よりも、多くの友人・先輩を何かとあげつらって、ずいぶん礼を失している。謹んで罪を待つばかりである。

この三教授と私との会話はほぼ十回で、一回二、三時間であった。その速記をもとにして、私が書き直した。三君の質問や議論はこのほかにまだたくさんあったのであるが、その方はすべてかんとんにまとめて、ただ私の発想を誘導する形だけのものにした。

この本を出すことになったのは、前記三教授と東京大学出版会の石井和夫君との特別のお骨折によるのである。またこの談話の演出監督は『エコノミスト』の堀利貞君である。これらの諸君にここで厚くお礼を申し上げたい。おかげで思いがけなくも『思ひ出の記』ができあがって、私は晩年のよろこびにたえない。この本がもしさらに何人かの読者をもつならば、私のよろこびはなお一層大きくなるであらう。

一九五九年（昭和三十四年）四月

東京にて
大内 兵衛

目次

はしがき

第一章 わたくしの学生時代・・・・・・・・・・・・・・・・一

どうして経済学を志したか(一) 当時の東大(九) 田尻稻次郎(三)

山崎覚次郎(五) 歴史なき歴史学派(二六) 新渡戸稻造(二六) ヴェン

チヒ(二四) 社会主義と学生(三三) 矢作農政学・松崎財政学(元) 官

学と私学(三三) 学界の中心・一橋(四四) 津村の『国民経済学原論』

(三六) つまらなかつた四年間(四四)

第二章 社会政策学派の盛衰・・・・・・・・・・・・・・・・四三

社会政策学会の由来(四三) 労働問題の桑田熊蔵(四七) 社会政策の福

田(四九) 社会政策学会の事業(五五) 全盛時代(五五) 経済学の独立と

新人登場(五五) 米国学(五八) 役人を辞めた(五八) 東大に帰る(五九)

第三章

経済学部と経済学の独立

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 三

「小さき旗上げ」(癸) 河上・福田時代(乙) 戦鬪的弥次將軍福田徳三(壬) 抜き難き人道主義者河上肇(亥) 堺の福田・河上批判(子) 同人会の活動(丑) 社会政策学会の内紛と改組(寅) 社会政策学会の老衰死(卯)

森戸辰男君(辛) 土方成美君(壬) 舞出長五郎君(癸) 糸井靖之君

(丑) 矢内原忠雄君(卯) 一国を興す人(辰) 河合栄治郎君(巳)

本位田祥男君(未) 後年の学内対立(申) 梶田民蔵君(酉) 梶田保

之助君(戌) 『資本論』の出版合戦(亥) 森戸・梶田の論争(子)

森戸事件(丑) マルクス主義に入門(卯) 迷える羊、ドイツへ渡る

(辰)

第四章

ヨーロッパ留学・・・・・・・・・・・・・・・・ 三

インフレ下の留学生(三) ハイデルベルク(四) 不安定なドイツの

政情(五) 『金融資本論』を読む(六) 意外だった英国の社会主義

(七) パリの生活(八) 大震災で急ぎ帰国(九) 大文庫統々と輸入

(一〇) 留学は有益か(一一)

第五章 マルクス主義の開花期・・・・・・・・・・二四五

激動の十五年間(二四三) 東大経済学部の新風(二四三) 日本におけるレー
 デラー(二四五) 研究室の復興(二五〇) 財政学の講義(二五〇) マルクス主義
 開花期に咲いた大輪三つ(二五三) 大原グループ(二五三) 『社会思想』同
 人(二五三) 『マルクス主義』一派(二五三) 産労(二五三) 河上肇と『社会問
 題研究』(二五三) 『マルクス・エンゲルス全集』その他(二五三) 『資本主
 義発達史講座』(二五三) 東大の新進マルクシスト(二五三) 学生運動弾圧
 (二五三) 大森義太郎君東大を去る(二五三) 唯物史観の黎明(二五三) 学界の
 新人(二五三) どういう実があったか(二五三) 古典研究の復活とアイノコ
 経済学(二五三)

第六章 ファシズムに抗して・・・・・・・・・・二二七

三・一五事件(二三三) ファシズムの台頭(二三三) 三・一五と京大(二三三)
 京大事件への抗議(二三三) 東大転落の実証(二三三) 『資本論』禁書とな
 る(二三三) ぼくの演習(二三三) 封建論争(二三三) 教授グループ事件(二三三)
 一斉検挙(二三三) 狂った時代(二三三) 獄中の読書(二三三) 学問と実践の問
 題(二三三) 反動時代の経済学(二三三) シュンペーターの流行(二三三) 広域

論と日本主義(三六) 柳田民蔵と解党派(三七) 匿名評論の流行(三八)
『新興科学の旗の下に』(三九) 三木ブームの本質(四〇) 大原研究所の
衰運(四一) ファシズムの勝利(四二) 平賀肅学(四三) 国民服経済学
(四四)

第七章 嵐の中の経済学……………(以下・下巻)・二五三

肅学後の東大(二五) 大河内理論の魅力(二六) 舞出経済学の標高(二七)
大塚史学の功績(二八) 難波田君の『国家と経済』(二九) 風雪で鍛え
た知性(三〇) 戦争中の花形(三一) 中山、東畑の全集(三二) 貧弱だっ
た戦争経済学(三三) 戦時中の大原研究所(三四) 疾風の野の石かけ
(三五) スミス『国富論』の翻訳(三六) 鮎川義介氏の大原援助(三七)
渋沢氏の勤めで日銀に入る(三八) 終戦の詔勅(三九) うやむやに終っ
た金融改革(四〇)

第八章 解放と再建の初期……………三七

平和への胎動(三七) 日本統計研究所(三八) 蛮勇演説(三九) 終戦当初
の経済政策論(四〇) 落第大蔵大臣(四一) 高野先生とNHK(四二) 民
主戦線統一運動(四三)

第九章 東大に復歸して……………三九

無罪と大学追放(四〇七) 大学復歸(三九) 経済学部 of 再建(三九) 東大の
 パージ(三六) 社会科学研究所の新設(三六) 東大制度の諸改革(三七)
 経済学部の改革(三七) 戦後の講義(三九) 天皇と経済学(三九) 戦後の
 著述活動(四〇) 『資本論の研究』(四一) 『日本資本主義の研究』(四二)
 マルクスの翻訳(四三) 経済学部三十周年(四四) 停年(四四)

第十章 学問と實際の境……………四一

三つの自戒(四一) 統計制度の改革(四二) 社会保障制度の整備(四三)
 日本のビバリッジ案(四四) 老齡年金制度の成立(四四) 小さい子だが、
 大きく育てたい(四五) ヒモつき論の展覧会(四五) 大学教授と政府顧
 問(四六) 『はだか随筆』への危険(四六) 日本でなぜマルクス学が盛
 んか(四七) 法政大学総長となつて(四八) 私学経営のむつかしさ(四九)
 うらやましい官学の財政(五〇) 教育改善には長年月がいる(五〇) 民
 主化をはばむ三大学闘(五一) 中小企業のもつ意義(五一)

第十一章 百花斉放の現代経済学……………四四

世界のマルクス経済学の潮流(四四) ソ連の官僚マルクス主義(四五)

第十二章

経済学の楽しみ

中国の實踐マルクス経済学(四四七) イギリスの保守的マルクス主義(四四七) プラグマチック・マルクシズム(四五五) 無教会主義マルクシズム(四五五) 進歩した日本の「マルクス経済学」(四五五) 日本資本主義論の新展開(四五五) 講座派と労働派の論争はどうなったか(四五五) マルクス主義経済学は有効か(四五五) ケインズの経済学(四五五) 近代経済学の国民所得論と財政論(四五五) 日本の近代経済学(四五五) ミソクソ合計の『経済白書』(四五五) 中山伊知郎君の経済学(四五五)

経済学者の運命(四五五) 三つのタイプがある(四五五) 近代経済学者は幸福か(四五五) 官庁経済学(四五五) マルクス経済学か近代経済学か(四五五) マルクスでメシが食えるか(四五五) 学生時代の武者修業(四五五) 経済学の平和共存(四五五) お互に敵を知れ(四五五) 曲り角にきた日本のマル経(四五五) ボーイズ・ビー・アンピシアス(四五五)

四七九

年 譜

人名索引

第一章 わたくしの学生時代

どうして経済学を志したか

——まず略歴からうかがいましょうか。

私は明治二十一年（一八八八年）に生まれて、中学時代に日露戦争を見た。そして日露戦争が終ったときに熊本の高等学校へ入った。東大へ入ったのが明治四十二年である。その当時は東京帝国大学法科大学といった。その法科大学の中に、明治四十一年に経済学科というのが呱呱の声をあげた。それは法律学科や政治学科に比べて非常に微弱な学科で、志望者も法律学科や政治学科の三分の一ないし五分の一という状態であった。私はその二回生として入学した。修業年限は四年。大正二年に卒業して、直ちに大蔵省に入った。

——そのころ、先生は学生としてどういう経済学を習われましたか。

その答は、日露戦争後の不況時代に、日本にはどういう経済学が行われていたかということを知るのに役立つでしょう。しかし、その前に、ぼくがどうして経済学をやるようになったかという話をしましょう。というのは、その話は、どうして日本の大学に経済学科が置かれるようになる

ったかということと密接な関係があり、そういう情勢のなかで、なんとなく、珍しいもの、新奇的なものを求むるという私の気分によって、私が経済学を選んだのだろうと思うからである。

明治三十八年か九年か、はっきりおぼえていないが、河上肇が千山万水楼主人という匿名で『読売新聞』に「社会主義評論」というものを書いた。それはぼくが洲本中学（淡路島）の四年生か五年生のときであった。それを読んで初めて、何か社会というものがあるということ、そういうものの学問とか議論があるということを知った。当時、『読売新聞』と『萬朝報』というのが日本の進歩的な新聞で、それが私の田舎にも来ていた。それは、いわゆるハイカラな人（いまのインテリ）の読むものであったわけだ。それより前は『日本』という新聞がインテリの新聞だった。ぼくの家ではそれを読んでいた。当時としてはぼくの家は田舎のインテリの家であった。中学生としてもぼくはやはり文学書生（文学青年）であった。ちょうどそのころ、同級生の川路柳虹君がすでに『文庫』『新声』の新星であって、何となく新しい文運が動いていた。そういうわけで、ぼくがこの新聞で河上肇を読んだのも、その内容のため読んだのではなく、主としてその文章のために読んだのであろう。それにしても、その文章にエキサイトしたのは事実であった。その証拠には、その『社会主義評論』という連載ものが本になったとき、それを再三読み返した記憶がある。なお、読売新聞には、これとほぼ同時に「東西大学比較論」というのが連載されていた。この数年前、京都大学が新しくできて、その名声があがってきていた。そして日本の一般国民が京

都大学というものはどういうものか、学者というものはどういうものかを問題としていたとき、この学界評論はこれに答えるものであった。そして、それは読みものとして非常に好評であった。多分、正宗白鳥などが読売へ入って、当時一流の小説をこの新聞に載せていたのと同じ理由で載せられたものであったろう。この「東西大学比較論」の筆者は斬馬劍禪というのであった。ずっと後年に、これは五来素川のペンネームであったことを聞いた。素川は相当なジャーナリストであった。この五来の学界評論よりもっと有名であったのは、河上肇の『社会主義評論』で、それは全国読書子をおどろかしたものであった。河上は、東京大学では金井延、京都大学では田島錦治、そういう先生をこっぴどくやつつけた。彼らは社会主義を知らないといったのだ。また河上はいわゆる民間の社会主義者——安部磯雄、幸徳秋水、堺枯川といった連中も全部なで切りした。彼らの社会主義は社会を救うに足らず、人間を救わないというのだ。

この本の最初の書き出しはこういうふうである。「近ごろ外国から帰ってきて、自分は千葉のある海岸に病を養っている。つらつら日本における学界の現状をみると、実に幼稚にして憂うべきものがある。そこで、筆をとって、いささか評論を試みよう」と。もっとも、当時のことであるから、もっと漢文口調で、もっと莊重なものであった。しかも筆者は千山万水楼主人とあるので、人々は、日本に、こんな偉い学者がいるというのにおどろいたのである。しかし、河上さんはこの評論の途中で筆を折って「無我の愛」という信仰に入り大日堂にかくれた。読者はここで

二度ビックリした。このとき筆者は河上肇なる名を初めて名乗った。ぼくが経済学とか社会主義とかいうものが学問の対象として世の中に存在するということを知ったのは、このような河上肇のおかげであった。多分十八歳のときである。しかし、ぼくが高等学校へ入ったのは、そういう学問をするためではない。それより前には、日露戦争にうかされて軍人になろうと思っていたが、十七歳のころ近眼になってその資格がなくなったので、ほかに行くところもなし、高等学校へ行くかと思つたまでであつて、多分に立身出世が目的であつた。もともと、ぼくは兄弟がたくさんあつた。みな田舎の学者であり、当時、三番目の兄貴は海軍軍人で、五番目の兄貴は東京の高等商業の学生であつた。そういう関係で、中学を出たらそのまま田舎で百姓をするというようなには、考えていなかった。ぼくの「経済学五十年」はこうして始まつた。

——先生のお家はインテリだったんですね。高等学校のときに、早くも経済学をやろうと思われましたか。いなかインテリだ。そういう兄貴たちと相談したところ、兄貴たちは出世をするのには、東京帝国大学が一番いいというようなことで、高等学校へ行くことにした。もともと、受験のために京都に上る途中で、神戸高商の入学試験を受けたが、これは見事落第した。もし及第していたら、いまの副総理石井光次郎氏や飯島幡司氏と同級たるの光栄を有したのであるが、英語がまずかつたので落第したわけだ。そこで、高等学校をうけ、九月熊本の高へ入学した。

熊本というところは、非常に保守的なところであつた。何しろ、東京の新聞が着くのは二日あ

との昼ごろであり、いまのようないい地方新聞がないから、『読売』とか『萬朝報』を毎日あこがれて読むというような程度にしか「開化」していなかった。しかし、日露戦争後は文運隆昌で、『新小説』それから『文芸倶楽部』『中央公論』『太陽』などという雑誌が妍を競った。寄宿舎には小さいリーディング・ルームがあったが、そこにはそういう雑誌があり、自然主義の香気とロマンチズムの空気がみなぎっていた。当時『蒲団』や『乱れ髪』や『破戒』が高等学校の学生たちをゆり動かした程度は、おそらく、『太陽の季節』や『挽歌』や『美徳のよろめき』以上であったろう。とにかくぼくは日露戦争のアブレ・ゲールとして漱石のいた高等学校で育った。そして『三四郎』として上京した。

熊本の高等学校では、東京の大学へ行って経済学をやるうなどという学生は一人もいなかった。その当時の高校一部というのは、大学の法科と文科との予備校で、三年生になると法科生と文科生に分けられる。そのとき大学での志望学科が決まる。ぼくは文科へ行って英文科か歴史科をやるうかなと思ったが、そういうことをやる才能もなく、友だちがそんなことをやったらメシが食えないといったので、文科の方はやめて法科をやることに決めた。ところが、高等学校に法学通論というのがあって、それが大学へいってからもやる唯一の専門学科であった。松浦寅三郎という、あとで皇太子殿下の教育主任になられた非常に偉い立派な法学士の校長さんがそれを受持った。その教科書はガーライスの『法学通論』というドイツの本であったが、なかなかむずかし

った。ところが、松浦先生は校長で多忙であるから、これに代るために、杉山道香という京都大学出の法学士が新たに赴任してきて、その『法学通論』を教えるようになった。が、この先生は「法学よりは経済学の方が面白い学問だ」といった。これは、学生たちを驚かした。ちょうどそのころ、東京帝大に経済学科というものができた。そして杉山先生は「君らも経済学をやってはどうか」ということをいった。それで十人ばかりの学生が集まって、杉山先生から経済学を習うことにした。

先生は丸善を通じてドイツからルイギ・コッサという人の『エレメンテ・デル・ポリテイシェン・エコノミー』をとりよせてくれて、これを課外教育みたいな形で教えてくれた。こういうことは今と大変な違いだ。当時の学生は、英語はもちろんドイツ語の原書も一応読めたのである。杉山先生はまた、「ロッシヤーが世界で一番偉い経済学者だ。君らも早くロッシヤーの本を読まにゃいかん」といった。「しかし、そのためには今はコッサを読め」といった。一年かかって四、五十ページ読んだかどうか。それにしても、このおかげで、経済学というものが何か、それをやるということはどういうことか、ということをし意識した。その後、杉山先生には会わない。誰からもその人のことを聞かない。しかし、ぼくには青年教授杉山道香は忘れられない人である。⁽¹⁾

明治四十年の夏休みであったと思う。ぼくは朝鮮へ遊びに行った。死んだ兄貴が後の朝鮮鉄道、当時の京釜鉄道にいたので、そこへ遊びに行ったのだが、ちょうど韓帝退位のときであった。こ